

カリキュラムに現れた変化の詳細については省くが、特に注目すべき点を言えば、学科目を整理し、共通学科と選択科目に分け、履修に融通性を持たせたこと、明治三十八年以來余りにも専門化し過ぎた学科目の配分を是正し、全生徒が美術史、美学の基礎的教養を身につけるよう科目を配置したことなどである。明治三十八年以降、各科それぞれの専門に則した知識を身につければよいという考えから、予備科でわずか一学期間「歴史」(美術史)を学んだ後は日本画科生徒は「東洋絵画史」「風俗史」「美学」を、西洋画科生徒は「西洋絵画史」「西洋考古学」「西洋彫刻史」「風俗史」「美学」を、彫刻科生徒は「東洋彫刻史」「西洋彫刻史」「西洋考古学」「西洋建築史」「風俗史」「美学」を、図案科生徒は「西洋建築史」「東洋建築史」「風俗史」「美学」(同科の場合は第一部、第二部に分かれた)を履修することとし、また、金工科、鑄造科、漆工科に至っては、前二者は「金工史」のみを、後者は「風俗史」「漆工史」のみを履修すればよいことになっていた。それを今回改めて、日本画、西洋画、彫刻、図案、建築、金工、鑄造、漆工の各科とも一様に「東洋美術史」「西洋美術史」「美学」を履修し、さらに各科それぞれ専門の学科目を履修することにしたのである。なお、この外に各科共通の履修科目であった「外国語」は時間数が半減し、日本画、西洋画、彫刻三科の履修科目「美術解剖」「遠近法」は従来どおり。図案科、建築科の履修科目「用器画法」も従来どおりであるが、金工科、鑄造科、漆工科にもこの科目が課せられることになった。

#### (九) 図画師範科の位置

図画師範科は従来の「東京美術学校規程」には含まれず、「東京美術学校図画師範科規程」(明治四十年発布)が適用されていたが、今回後者が廃止され、同科は改めて本校規定の中に位置づけられた。それとともに同科の履修科目に「心理学」「色彩学」が加えられ、また、本科と同様に入学資格中の年齢制限が撤廃されるなどの変化があった。

#### ② 独立当初の建築科

『建築雑誌』第一一〇号(昭和五十年十二月)、第一一〇六号(昭和五十一年四月)の特集「私の受けた建築教育」から建築科独立後数年間の時期の様子を記した文を抜粋する(数字は漢数字に統一)。

#### ○山脇巖〔大正十五年卒業〕

上野のかつての美術学校——現・芸大——は、自分等が受験する年——〔大正十二年度まで図案科第二部として募集〕大正十年四月——に、はじめて建築科として公募された。この建築科は大正三年に図案科第二部として、既存の一般平面図案科から切り離なされ建築を主体とした、立体図案の専攻の学科となった。当時一般に建築設計が一般図案と区別されだした時代だった、その時の入試の応募者は約八倍ほどだった。

入試科目に、その年はじめて他の学科——絵画、彫刻、工芸——の入試とは別に数学と語学〔それ以前にも語学と用器画法が課せられた〕が追加された。勿論入試の実技には可なり重点が置かれたらしい。また戦後新制大学制度がしかれるまではこの珍らしい五年制はそのままだった。現在の他の大学のように教養学科で専門学科の時間が短縮されたりする事もな

く、五年間は専門の建築の講義と実習で、十分に使うことが出来たのはいまから考えると幸いだった。

自分の在学中は、ドイツの表現派の建築家ハンス・ベルツヒやメンデルゾーンの作品が、日本の数少ない建築雑誌や単行本で紹介され出したばかりの時代であり、この新しい傾向の建築写真集が、新しい絵画や彫刻写真集などと一緒に街の本屋で見られるようになったばかりの時代であった。

この建築科は過渡期のためか、従来の図案科第二部の講義の引き継ぎが多かった、その教授陣も、岡田信一郎教授を主任として、他に大沢三之助、森井健介、古宇田実の諸教授等で建築科としては極めて手薄だった。その講義内容も大沢教授の建築装飾史、西洋文様史、森井教授の数学、構造力学、古宇田教授の建築学、西洋建築史、その他新設の北村耕造先生の材料学、施工法、他に関野貞先生の東洋建築史などがあった。なかでも岡田先生の製図は可なり厳しく人数が少なかつたのと時間数が多かつたので、細かな注意も受けることが出来、また個人的に細かな質問も自由だった。これ以外の一般講義の中の絵画史や彫刻史、美術史、美学など時間さえ重ならなければ、いくらでもめぐり込む自由があった。

講義以外の時間は製図室に閉じ籠り、日の落ちるまで図板に向っていた。特に、絵画は一週間に半日宛で二日は必ず素描室に通い、長原孝太郎先生の人体素描の手ほどきを受け、時々岡田三郎助教授の批評も受けられた。しかし終日の製図室の仕事はかなり苦しかった。この時間にいわゆる立体図案の古い感念「イマ」から抜け出

して、仲間と講義では聞けないドイツやフランスの近代建築の動向の資料を持ち寄ったり、その作品集やその論文を中心にして製図をそっちのけにして夕方まで熱をあげた。新刊の資料をあさるため丸善の洋書部へはいつもの仲間とよく通ったものだ。この製図室の作業のためばかりではなかったが、この五年間に四人の同窓が相次いで病没した。近代建築熱に浮かされ通しだった自分等の前では当時分離派の運動や、また先輩たちの展覧会が相次いで展開され、また近くの池の端では分離派が一部加勢したという博覧会の建物も見せつけられたものだ。「下略」

#### ○平松義彦〔昭和三年卒業〕

〔上略〕

教授陣では、やはり岡田信一郎教授の製図室での指導が忘れ得ぬものとして、いまでも温い印象を残しています。しかし先生はその頃すでに健康がすぐれなかつたため、私たちのクラスが上級に進むにつれ、講義の回数も減り、製図室にこられる日も稀になっていきました。

学生の数が一クラス七名前後なのでクラス間の隔りがなく、上・下級が一緒に聞いた講座もいくつかあった程です。自由な空気のただよった学校で、のびのびとした教室風景の中で教育された、恵まれた好条件はあったのですが、しかしいまにして痛感することは、文部省の教育体制の欠陥でしょうが、講義に表れる内容が一般技術教育と同様、建築をただ知識として、或いは技術面だけでとらえる、教育に対する形式主義とでもいえる性格が強

く、建築のもつ人間性との結びつきという教育の基本にふれる点で、不足したものがあつたように思います。勿論白紙の学生に建築の「いろは」から教えるのですから、この知識・技術の修得が何より必要であり、大切なことであるのは当然ですが、例えば建築史が単なる様式の変遷史としてのみとらえられており、それが生れた時代と、その社会の人間生活の歴史とのかかわりの中で完成された「生きた建築の在り方」とでもいへべき技術の歴史観としてのとらえ方に欠けた側面があつたと思います。

その点、洋画の学生との合同講義で、矢代幸雄教授の西洋絵画史の講義などには、却って情熱をわかされたものです。中世絵画でジオットーとかボチチェリーになると、講義中に涙を流して話される先生の講義に、深い感動を覚えた記憶があります。当時先生は中世の社会に思想的にも心に通う共感があつたのだと思っています。

山脇さんもおられるように、当時はドイツ表現派の建築が日本で紹介され出した頃で、雑誌「Moderne Bauformen」とか「Deutsche Kunst and Dekoration」などにのる新しい建築写真が製図室をにぎわしたものです。また分離派建築会をはじめ、もろもろの展覧会が開かれ、日本に建築運動が相ついで起る端緒となるときでした。

これはヨーロッパの新しい建築からの影響によることは当然ですが、建築運動だけではなく、他の文学・演劇、その他一般社会に表れた時代的变化と無関係ではなかつたと思います。さきにかいた『歴史観としてとらえる建築の在り方』ということについて

も、これら外から教室に流れ込んだ風潮が、学生の新鮮な魂に強くふれたし、講義内容に欠けた側面を満たして教室の話題を豊富にし、それが学生の思想的成長を助けたと言えるでしょう。

私もその頃創宇社建築会やその外のグループと、また山脇さんに誘われて演劇人との交友関係を持ったのですが、社会に向けて目を開いていった年代だと思えますし、その中でその後建築家としての人間形成に役立つ糧を接取していったように思うのです。

〔下略〕

#### ○海老原一郎〔昭和五年卒業〕

〔上略〕美校受験のためその年度の卒業製作展をみに行つたが、丁度その年（大十三）の建築科の卒業生は只の一人（金沢庸治さん）で、その作品は私の建築という概念に全くなかつたような曲面だけの一塊の土の模型で寸のつまつた鯨のような形であつた。未知の世界に突然入つたワクワクした感じを今も忘れない。試験科目の中で学科より先ずデッサンが重要視され第一日第二日も工芸部棟の前の片隅の大きな木の蔭に建つ木造のアトリエ風の建物の中でミケランジェロの石膏デッサンを描いた。次第に受験という圧迫感、緊張感はなくなり楽しささえあつた。後で知つたのであるがそのひっそりした建物は久米桂一郎先生のアトリエであつた。英語の試験には判らない単語も幾つかあつたけれど何とか合格する事が出来た。用器画の課題は円錐へ円筒の相貫体の作図だつたと記憶している。九十余人がうけ合格定員七名だつた。全く好運という外はない。入学式は弟子入りの感じだと思つた。

建築科教室は美術学部本館の王朝風の玄関のあった建物の右脇の隅で正門から梅林がずっと続く奥にあり小人数にふさわしい煉瓦造のよい建物であったが今はない。

主任教授は岡田信一郎先生です、体も思うにまかせず講義中もせき込む事が多く痛々しい事であったが、すでに大正期において名作を幾多手がけられた巨匠の風ほうは衰えず、その生き生きした発言にはきびしさがあり、まれに行われた我々の学生の課題作の展示について批評を伺う折など短い言葉で、またシンラツな形容で急所をつかれた例は忘れる事が出来ない。関野貞先生の日本建築史、大沢三之助先生の西洋建築史は個人教育に近い五、六人で聴講したが、今から思うとゼイタクの限りだったと思う。それぞれ熱のこもった独壇場はきく人数など眼中にないお人柄の表れであった。美術部、工芸部を通じての合同講義も美校の特色の一つで大村西涯先生<sup>(歴)</sup>の東洋建築史<sup>(美術)</sup>、一年の時の板垣鷹穂先生の、そして二年三年の矢代幸雄先生の西洋美術史があり、それぞれ独自の境地に没入されている方々の力と美しさを感じとる事が出来た。構造の森井先生の講義はとうとう身につかなかったけれど、先生の人間性には思い出が多い。製図教室は今から思えばゼイタクな程のスペースがあり、学年の区別なく全学級三十名位の幾人かが自由に出入し仕事をし集っていた。初学年頃はよくコピーがあったがルネサンスの採色などは、その時はいやでも身についた作業だった。課題の一番最初は「上野公園に建つ交番」のデザインで私は早速粘土と取り組む事から始め、けずったり、足したりの格闘をした。以後噴水、門から小住宅、小駅舎と次第に建築ら

しい課題に移行していった。実技習得の側面として一年の間は石膏デッサン、二年からはずっと人体モデルによるデッサン(時に油彩)があり、午前中講義の合間に自由に建築科専用の絵画教室に行くようになっていた。モデルさんの約束は週末に自由に交渉した。絵の指導は長原孝太郎先生で、時折油絵科の友人も入って来て一緒に描く事もあった。また塑造の教室へ行って粘土をこね物の形をつくった。五年間の学生生活(と言っても私は途中で病気をし一年留年通算六年間)中私にとって特によかった事は三年と四年の二回の春休みを利用した京都を中心として近畿に実在する名茶室の実測(室内)とその内外写真撮影をやった事であろう。これは仲間四、五人と企画し学校からお願書を各方面に出し御承諾を得た上で実行した。これに関しては岡田先生に特に非常な御援助御配慮を煩わした上で可能な事であった。「中略」何も判らなかつた我々にもこの二年通算八十日間の作業は創り出された空間のみ力と近づく事の無限の深さみたいなものを教えられた。当時私の学生生活の後半は世相の激動に思想はゆれ動かされつつも、造型の美の追求にスケッチブックを一週間で描きつづし模型の切り屑でうずもれた日常であったが昭和五年春四月設計事務所の一隅へと出て行った。その時が実際に習う事へのスタートであり、それは現在もまだ続いているのである。

### ③ 職員一覧

職員